
ピヨピヨ金城 ~今、空へ立つ！~

和呼之巳夜己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピヨピヨ金城　　今、空へ立つ！

【Nコード】

N8024E

【作者名】

和呼之巳夜己

【あらすじ】

その雛は生まれながらにして呪われし魔剣ルーザヴァを持つていた。そんな雛ピヨピヨ金城が世界を救うため、東西南北旅に出る！本当は大切なおじさんを殺されたから復讐するつもりだったけど。ピヨ金の仲間も個性豊か！元ヤンキー風の鳥ダンピヨ金のガールフレンドピヨ子この二人を仲間に、謎の怪鳥軍団ロードをぶとばせつ。切り裂きジャックは殺しません！、アルティメットインビンシブル暴力女に続く第三弾は雛の冒険物語だつ！

プロローグ 1 2 (前書き)

地獄をみた彼は、この世界も地獄にしようとならんと塔の階段を上る。

プロローグ 1'2

プロローグ 1・・・破滅の階段

ピヨ歴 2531年

21月29083日 午前127時 ピヨピヨ金城開幕

コツ・・・コツ・・・コツ・・・。

テンポよく、誰かが階段を上っている。「誰か」が上っている階段がある塔を人は、「破滅の眞侵塔」と呼んでいた。しかし、その階段は現実にあるのかも、定かではなく、おとぎ話なのかもしれないけれども「誰か」がその「破滅の眞侵塔」をのぼっていると言うことは現に存在するのだろうか。「誰か」はその階段をまだ上り続ける。
「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「誰か」は無言で笑った。そして一階だけ口を開いて笑うと階段上から消えた。最後に言った言葉はたぶん

「これでこの世も終わりだ。これでこの平和の地と呼ばれたここも地獄となるう。三十年前の樂園ディアカッサと同じく・・・。ふふふ。私の極楽の時間を長く続けてくれよ。そうすれば、神に誓い存在となるのだから。まずは天空の白の城主を配置につけよう。主役もないと面白くない。そうだな。呪われた剣を生まれながらにして持つ・・・良いではないか。もちろん仲間もいた方がいい。おお。お決まりの裏切りもなければ。ふむ。悪くはない展開ではないか。」

であろう。・・・・。これが全ての元凶の元であった。これが・・・。
・これが。

そして別の時間の別の場所、神木バスカヴィルで。主役はこの世に

生を受けた。この瞬間、主役は生まれたのだから。

次の日の新聞ではこの驚異の噂が世界的規模の新聞社、ピヨ四新聞の記事にされた。それは伝説から始まっていた。

・・・・・・伝説・・・・・・

その昔、鳥たちは、絶滅の危機に瀕していた。邪悪な魔物と呼ばれる怪鳥軍団ロードによって破滅の寸前に追いやられたのである。長蛇の怪物イパヴァも参戦していた。そんなとき立ち上がったのは伝説の勇者、バスカヴィルである。ロードのリーダーヴィアソン・ルーザヴァと七日間にも及ぶ一騎打ち《聖戦》の末勝ったのはバスカヴィルだったが、その三日後、重傷によって死んでしまったのである。そしてバスカヴィルが命を懸けて守ったその血を鳥たちは生地とたたえ、神木町バスカヴィルが出来たのである。

そしてその一方で、ロードのリーダーヴィアソン・ルーザヴァもまた、息を引き取ったのは三日後であった。リーダーを殺された恨みで、暗躍する鳥たちもいる。闇に潜み、ヴァスカビルの仲間を殺していくのだ。その生け贄の血で、ヴィアソン・ルーザヴァは復活するという。

と言う伝説がある。それを救うものはいないのか。ピヨ四新聞はその勇者をバックアップしたいと思っている。もし、いるなら、我々を助けてほしい。バスカヴィルに永遠の平和と愛とを・・・。

オルフェイス「真実」第一章より

それは一つの物語であり、物語ではない。・・・・真実とは虚となり、常に牙をむくものなのだ。信じるのは自分次第。信じられるものもまた、自分次第。嘘が本当で本当が嘘でもある。信じられるのは・・・・自分だけ・・・・これが、わたしはこの世界の、掟だと思う。おそらく、真実の掟だと・・・

世界の真実は知っても虚しいままである。世界は醜いから。また、醜くしたのも、自分達だから・・・・。これが、真実であるのだ。

誰がどういおうとこの事実だけは、変わらないのだ……。これから変えていけるようなものではないのだ。　どうあがこうとも・・この世界は変わらない。恐怖が近づいているのも知らないのは自分だけなのかもしれない。

プロローグ2ピヨピヨ金城生誕

俺は日記を開いた。そしてまだ書いていない今日のことを書き記した。

一羽の赤子についてである。

バスカヴィルに赤子生誕

本日生まれた赤子は、みると絶叫した。母親も例外ではなかった。子供が産まれたというのに母親は

「こんな子供じゃないわ。捨ててちょうだい！」

と語った。その子供は、保育施設に預けられることになったのだが、どこの施設も預かるうとはしない。皆怖いのだ。赤子の額にある魔剣、ルーザヴァが……。英雄バスカヴィルをしに追いやった一番の理由、それはヴィアソン・ルーザヴァの持つ額からのびる剣である。

そのルーザヴァが付いている子供は殺される運命となった。そう言う運命の元に産まれてきた子供なのだ。

その子を俺は引き取った。どんな運命になろうとも。俺はその子を哀れみ、引き取ったから。この子の名前はピヨピヨ金城。

そこで男は日記を書く手を止めた。その子供が泣き出したからである。その子こそ、男が日記に記したピヨピヨ金城であった。そのピヨ金に最悪の日が来るのは目前だった。そしてその目の火に真実を知るのは大きく成長した赤子だった。

ブローグ1'2(後書き)

次回より本格スタート！

第一章 ロード襲来！小父さんの死（前書き）

彼の名前はピヨピヨ金城。それを育てたのは、ルービスという男であつた。あれから行く年もの年月がたち、ピヨ金は少年へと成長しているのだつた。

第一章 ロード襲来！小父さんの死

一章……小父さんの死　ロード襲来！

あれからはるかなときがすぎたある夜、悲劇は起こった。

ピーンポーン、ピーンポーンと、何度も小父さんの家のチャイムがなった。小父さんはピヨ金に「隠れているように。」と言いついて玄關に向かった。まるで悪いやつが来ているかのように。小父さんがドアを開けると、いきなりギリリと光る刃物が小父さんを刺した。

「死ね。ルービス。」

ルービスと呼ばれた小父さんはドアから入ってきたロードの手によって、殺された。隠れていたピヨ金は、箆笥の隙間からそれを見てしまった。たった一人の最愛の小父さんが殺されるのを。それを目撃したピヨ金は息を呑みに飲んで飲み込んだ。

「小父……さん？……小父さんが……」

ピヨ金の頭が真っ白になっているときロードの一羽は意外な事を言い出した。

「あの、伝説の魔剣ルーザヴァを持つ「ピヨピヨ金城」は、いったいどこにいるんだ？」

俺を探している。この俺、ピヨピヨ金城を……

「仕方ねー。城に帰るか。」

と帰っていったとき、地図を落とした。うつかりしていたのだろう。それを聞いた、ピヨ金は、その地図を拾うやいなや城へと急ぐのだった。夜の冷たい夜風の中ピヨ金は翼を開くのがあった。天空の城に向けて。ピヨピヨ金城は、自分が飛んでいることに涙した。いつまでも飛べなかった自分が今こうして飛べるのも、おじさんが丁寧に教えてくれたからだ。飛べるようになってからと言つもの、おじさんは人目を気にせず、一緒にうおーきんぐ《ウィンキング》《ウィング》と言つものを一緒にしてくれた。それを今ふと思い出し、空には、

ピヨ金の涙が舞うのであった。

「小父・・・さん・・・。」

ピヨ金は天空の城へと、飛び立つのであった。

第一章 ロード襲来！小父さんの死（後書き）

次回、不良ヤンキー、ダン現る？ピヨ金の登坂をみたダンはピヨ金に決闘を言い渡すが・・・。

第二章 天空の城へ！ダン現る（前書き）

今思ったんですけど、ピヨ金って雛なのに何で飛べるんでしょうか？疑問です。

第二章 天空の城へ！ダン現る

二章・・・・天空へ！ダン出現

僕の横で大空を優雅に飛んでいる。これが誰かって？そんなことか。ヤンキーの頭領、つまりリーダーだ。鳥なのだが、頭はリーゼント、口には相当年季の入ったパイプと、きているものは、黒く長い羽織物に、喧嘩上等のゴシック文字。こんな柄の悪い服、ほかにどこにも無いだろう。100%。特注だろうか。お手製だろうか・・・え？こんな事が聞きたいんじゃないって？あつ！そうか、みんなが知りたいのつてもしかて、僕が、ダンと知り合ったわけ？なーんだ。それなら簡単。それはバスカヴィルを出た一日後。当ても無く飛んでいると見た事も無い鳥達に囲まれてタ。それが、ダンの率いるヤンキー集団ウィンダーだった。たまたま持っていた、いや、この場合付いていたが正しいのかもしれないけれども、これまでもただで邪魔だった鶏冠ていかかのルーザヴァを見て、「こいつが、新しい頭だ。」と言った。そしてむかつくんだけど見るからに貧弱そうだって言って、修行を手伝ってやるとか何とかいって、付いてきた。行き先が天空の城だ。といって、場所を知らないかとたずねたら、それはなおさら付いていかなば！といって、ダンが付いてきたま、天空の城って恐ろしそうだから、ダンみたいなやつがついてきてくれたら戦いがあつてもらくだからいいだろうと、ダン一人だけ付いてくるのを許した。そして現在に至るのですが・・・。。。。。。これがたぶん皆さんの知りたいことだと思っんですけど。

ボーっとしていた僕の事をダンがつついた。

「あれが、天空の城に行きたつた一つの方法だ。どうする？いつちよやるか？」

といいながら、腕はねを組んで、ニヤニヤしている。そのたつた一つの

方法は、天空に上る階段を上り天空の城に行くというものだった。その階段は下りることが不可能で、しかもアンデットモンスターがうようよいるということを町で言ってるのを聞いたことがある。

ザッツと砂煙を上げて後ろから来ているもう一羽にダンは気づいたらしい。

「何者だ。」

「あら、せっかく天空の城に行く方法を教えてあげようと思ったのに。それしかいく方法を知らない無能な鳥達に。まあ、一般公開は天空の階段だからいいか。何なら、私が簡単な行き方、教えてあげてもいいわよ。だけど、ひとつ条件があるわ。その黄色い雛、私と一緒にデート、しましょう。それが条件よ。どう？この条件飲むのかしら、飲まないのかしら？」

このオレに？初めて！デートのお誘いが来た。うれしいような・・・でもそれが、天空の城に行く条件なら飲んでやる。ってゆうかこちらからお願いたします。【やりー！】

「いいよ・・・。ダン。待ってて。いこう君は？。」

「私？私は、ピヨ子。由緒正しきピヨ・ピヨーン家の鳥よ。」

ピヨ子は冷や汗をかきながらこういったのにデリカシーが無いピヨ金はこう言ってしまった。

「フーン。そんな名前効いた事ないのになあ。」

そして勝手に俺は、ピヨ子と手を組み合わせた。そして光輝くその一歩先へ、足を伸ばした・・・。

この先に続くのはHAPPY ROADだ。これで永遠の幸せが・・・

End

.....

「ってこんな話じゃねーだろう！和呼之 巳夜己っ！てわけで次の章に続くから、絶対みるよ。俺の初デートのhなしなんだから！」
以上、ピヨ金より。絶対だそうなので付き合ってあげてください。

無駄に興奮しているこの馬鹿雛に。和呼之已夜己より本当にすみません。つきあってくれてあげますか？

第二章 天空の城へ！ダン現る（後書き）

次回はデートなんです、これまたうまくいかないもんですよ。普通は。

第三章 ペロペロとくちくちくはつデート。(前書き)

これは、遙か天空に雛が待っていた時代の話・・・え。いつの時代も雛って空飛ばないの・・・。

第三章 ピヨピヨとつぎはつデート。

三章……ピヨ金ドッキ初デート

僕は今ピヨ子とともにテーマパーク、ピヨ四座・ワールドにいる。

「ねえ。ピヨ金。今度は、どこに行くう。」

などピヨ子としゃれた話をしているとピヨ子のその声とほぼ同時に爆音がテーマパークピヨ四座・ワールド中に鳴り響いた。その爆音と爆発で何匹かの鳥が殺された。そして爆撃の中から、黒い鳥の影が現れた。ピヨ金はとっさに思った。こいつらはあのルービスおじさんを殺したやつらじゃないのか……。そう思うとすぐに駆けつけたくなつたが、ピヨ子にとめられた。

「あんなやばいやつこんなところで相手にするなんて馬鹿だけよ。今は逃げるの。一刻も早くネ。さあ行くわよ。」

と、ピヨ子が行っているとその中から意外な鳥が出てきた。ダンだ。付いてきてたんだ。まさか僕とピヨ子とあんなシーンやこんなシーンの素敵な青春のページを見られていたのではないか。と思うともの凄く恥ずかしかった。

「ピヨ金、大丈夫か。こんなやつら、やっちまおう……。行くぜい。」

「えええ？でもピヨ子が……。ちよつ待ってえええええ。ダン、STOPSTOPストップうウ嫌ああ。」

ほんとに駄目駄目なピヨ金であった。馬鹿である。はつきり言おう。
馬鹿も馬鹿、大馬鹿。キング・オブ・ザ・ダメ

それとは別に、ピヨ子は売店の椅子からばかばかしい二人組みのこゝとをチヨコパフェインスイーツチヨコアイスをペるペるなめながら冷たい眼で見っていた。極めてあほくさつと思うぐらい冷静に。なんて馬鹿なやつらなんだと思った。「こんなやつ、任務のために……。と。しかしそんなことを言つたと知ると、口を手で押さえた。その時、チヨコパフェインスイーツチヨコアイスを落としてしまった。

少し涙ぐんでいると、ピヨ子は襲われた。

「嫌あああああああ。」

そのロードの一員は見ていた。ピヨ金とこの鳥が「デイト」と言うらしい事をしているのを。

正しくは「デート」である事がお分かりだろうか。このロードは自分がした事の無いデイトをこんなちび達がしているなんて許せないっ！と八つ当たりした。世代違いの八つ当たりだ。そしてピヨ金は、ピヨ子のピンチだつとルーザヴァをサツと投げた。

しかしさすがはピヨ金である。ものの見事にはずした。これまでやってきた事が恥ずかしいぐらいに。そしてその鶏冠とんか、ルーザヴァがどこに当たったかというところ……運が悪いといつてしまえばそれまでだが、それよりかわいそうである。ピヨ子のわずか3mm下に見事に刺さったのである。そのロードの鳥は男だった。ピヨ子の3mm下とは、その鳥の股間。そこにさつくりと刺さったのだからもの凄く痛いのである。股間に刺さるとは……まさか……ピヨ金は冷や汗をたらたらとたらしした。世の汗の一滴がコンクリートの地面に付くと同時に、

「不我嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼……。」

そしてその男は、動かなくなった。哀れな最後であつた。かろうじて、生きてはいたが……。恥ずかしかった。ロードの一軍大將とも想像も付かない哀れな。一方ダンは、ピヨ金を置いた後敵をわんさか倒した。その数およその推定200だがそれからあの悲劇が起こったので、その数+50残りのロードの残党兵、200匹

それにも負けないように、ピヨ金もピヨ子と協力して、150は倒した残り50。しかしその奥には恐ろしいやつが潜んでいた。鳥をも一口で食べる伝説の怪物「イパヴァ」伝説にも登場する蛇の怪物だった。しかし今は蛇ではなく鳥の姿だった。そしてそのイパヴァは、三匹の鳥をディナーにすべく奥の鳥の骨で出来た王座から、出陣した……………。

「どけ……。小童どもをくろうてやるわ。」

するとピヨ金の元へ、体を徐々に近づいていった。それはあの伝説の蛇、イパヴァであった。

第三章 ペロペロやっきたのはツグート。(後書き)

次回、魔剣ルーザヴァの真相に迫れ。都下かいておいて別のことや
っちゃいますけどね。

第四章 イパヴァ vs ビヨ金一騎打ち・・・？（前書き）

デートってこんなに大変な物なんですか。

第四章 イパヴァ vs ピヨ金一騎打ち・・・？

四章・・・イパヴァ vs ピヨ金一騎打ち・・・・・・・・？

ピヨキンの近くまで来ると残党兵にこう告げた。

「どけ・・・・・・・・小童ども三匹をわしのディナーとしてくろうつてやる。オンカラカラビシワクソワカ・・・・・・・・。」

今まで鳥の姿をしていたイパヴァが、呪文を唱えるとあろうことに巨大な蛇になったのである。

これがロードのお偉いさんの魔力なのだろうか。

「小童どもおお。おとなしくわれに食われええい。シャアアア。」
真っ先に狙われたのはピヨ金だったのだ・・・。

ピヨ金は、魔剣「ルーザヴァ」を先ほど殺した男の股間から一気に引き抜いた。恥ずかしく仮死状態になっていた男は悲鳴を上げた。

一方ダンが残党をかたずけている。

「ウ奥羽ウウ奥羽ギャー~~~~わあわっわわわ」

ピヨ金はおもしろくなってしまい剣を抜いたり刺したりする。

同じ場所に。いや。僅かに何ミリかずれていただろうか・・・。ニヤニヤと笑うピヨ金非道なヒヨコだ本当に。そしてイパヴァに向かってその哀れな男鳥をブンナゲタのだ。

男はあまりの痛さと恥に気絶していた。羽で股間を押さえて。その羽根は赤く染まっていた。イパヴァはその哀れな男鳥を加えればききと骨がなっているのもかまわず食べた。最期に見たその鳥の残されたパーツもまた、股間を押さえていた。

「な・・・なんて非道なやつ・・・。」

ピヨ金が思わず叫ぶとピヨ子は、

「お前が言つなよ！」

と力の限り叫んだ。みんなまとめて馬鹿が多かったのであった。

いや、みんな馬鹿だった。かな？そのころもダンも戦っていた。残党兵と。

「射嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼ピヨ金死ねえええ」

ピヨ金は突如のことにルーザヴァをイパヴァに向けかまえた。しかしそれは風のようにイパヴァをはずした。すると、イパヴァは、さっと動きを止めた。

「こんなやつが本当に伝説の勇者でロードを壊滅に陥れるのか・・・。占い師おペタも分らん。おい。ピヨ金。今回の弱さでお前は、命取りをした。この俺を殺そうと企むなら、強くなれ。ピヨピヨ金城・・・。はははははははははははは。今度あったとき、お前をロード3大幹部の名において貴様をこの世から抹殺する。」

と言に残し、イパヴァは煙のごとく消えた・・・。ピヨ金は恥ずかしかった。ルービス小父さんの書斎にある本で読んだ。題は、恥ずかしい敗北の仕方だったかな。そこに乗っていた一文は「一番恥ずかしい死に方は相手に見逃してもらう事だ」・・・と載っていた。ピヨ子は、まだ手に持っているアイスをぺろりとなめた。「ウンめっ」思わず言ってしまった。この跡で二個三個と平らげてしまったのであった。

僕は決めた。ダンに修行して貰おう。でもこの決断は、時間はまだだあると思っていた僕の誤った考えだった。もうすぐあの人がいなくなるなんて。僕の前から。

第四章 イパヴァ vs ビヨ金一騎打ち・・・？（後書き）

僕は、強くなる。大切な人を守るように。

幕間 別れと修行 (前書き)

突然来た彼女は、突然姿を消した。
僕に、何も言わずに。

幕間 別れと修行

ピヨピヨ金城 幕間

修行がしたいというダンは、

「弱いから鍛えるってか？ピヨ金。ま、付き合ってやるよ。がんばんな。うおおおお。」

ガラガラと音を立て崩れてゆくピヨ金の後ろの岩。

ピヨ金の魔剣ルーザヴァをかすめる。

しかし根っからの気弱のピヨ金は思わず、赤ん坊のように尿をもらしてしまった。【ピヨ子に見られたら・・・とその晩思つと、とてもなく死んでしまいたいような感情になった。ピヨ金THE後日談】

「ひーん怖いいいいい。」

心の中ではピヨ子を呼び続ける情けない彼氏だった。

そしてそのだらしないボーイフレンドのガールフレンドは…………涼しげな森林にいた。

誰か来た。そう感じるとすうすうと空気を吸って決心をすると、
「出てきなさい。われに会いに来たのじやろう。天空の城の回し者めが。われと対等に話していいと思うておるのか。たわけものが……姿を現せ。それとも何か。先日ピヨ金抹殺の指令を果たせぬこのプリンセスを貴様流のやり方で殺しにでもきおったか？あいにくじやが、われが貴様に殺されるとても。お父上のお考えになる事はまいちわからん。しかしわれのこの命に代えてもピヨ金はまもって見せるぞ。」

草木が揺れ、そして木々がその者を避けるかのようにしてそれは姿を現した。紙のようにも見えた。

そちか。ライデインか。とピヨ子は思ったが、彼が現れると何もいえなくなってしまう。昔からの癖だ……。

天空の城ジュピターに居た古いころからの……。そうじゃ。童が

いたのは天空の城なのじゃ。ふとライデインを見るとゆっくり、ゆっくりと口を開いた。その声は小さかったが、はっきりと聞こえた。仮面の鳥、ライデインの声が。

「来てもらいましょうか。われらが天空の城のプリンセス。ブウウヒエフグイツユ・ピヨ子様。天空の城主、フィマナ様のただ一人の実子にて、われらが天空の城の次期後継者。」

「嫌じゃ。」

「いえ。あなたに行く、行かないの決定権はありません。私は、フィマナ様に従うものであり、ピヨ子様。あなたに仕えているわけではありませんので。さあ。いきましようか。」

ニヤ・・と不気味な笑いを浮かべるライデインにピヨ子は背中を擦じらすかのような寒気を感じた。その寒気の元が大切な仲間を襲うなどという事はまだ、ピヨ子にも知るヨシも無かったのである。まさか追ってきてくれるなどという事も・・・。

「ピヨ・・・金。」

「さあ。参りましょうピヨ子姫。」

「さようなら。ピヨ金」

イ

「ママでありがとう。こんな私を」

「空残烈覇。」

ピヨ子の意識はどんどん、どんどん暗闇へと消えていった。そしてその目にピヨ金が映ることなど無いだろうと、ピヨ子は薄れ行く意識の中で考えたのであった。

ピヨ金たちの前から、ピヨ子は消えた。

そしてピヨ子の居た森林はサアアアと誰も居なかったかのようにまた風で草木が揺れた。

ピヨ金は、さよならと言う誰かのメッセージを聞いたような気がした。

「そら耳か・・。」

それが、ピヨ子の最後の言葉だった。

そして……ピヨ子は最後まで抵抗したが、連れ去られた。そしてきずいた。彼も、私もお互いが好きなのだと。ライデインは私を、私はライデインを……

一方、同時刻ピヨ気の修行中のピヨピヨ金城はというと……

ガラガラがらがら……音を立て崩れて崩れる大岩は、ダンの崩している大岩の方向とは違った。まさか……ピヨ金は額から、修行の成果でやっとなす事の出来たピヨ気の炎が出ていた。

「がーらがらがら！ピヨ金、今宵こそ、貴様の命をもらう。そして今頃われらが姫ピヨ子様は……おお。そうだ。知っていたか？お前を愛するピヨ子様はわれらがフィマナ様のただ一人の実子だ。そして貴様の暗殺を指令された一人の哀れな女なのだよ……」

くはははははと高らかに声を上げるイパヴァ。

「黙れえええええ！」

絶叫ともなんともいえない大声がその場の気を揺らした。だが、そうは言ったものの初めて知る事実にはピヨ金は頭の中が無になった。

ギリリツと齒軋りをするピヨ金に対しダンは、

「やはり……あの女……最初から九代目頭領ピヨ金さんを狙つて。」

息を出来る限り大きくすって、出る限りの大きい声で言った。ピヨ子が始めてピヨ金を愛してくれたから？ピヨ子が僕に優しくしてくれたから？いや。それ以前の事だ。ピヨ子は、助けるんだ。僕が……

オレが、ボーイフレンドとして。僕が……！！！！！！

「違う！ピヨ子はいいやつだ。助ける理由はピヨ子が、僕を信じて、僕を暗殺するという指令をせずに、自分の意思で僕とイマまで一緒にいてくれたからだ。だから僕は、ピヨ子がしてくれたように僕は自分の意思でピヨ子を助けて見せる！そして戦わねばならないやつが、ピヨ子の両親だとしても、ロードだとしても、僕は必ず、ピヨ

子を助けるんだあ！」

もう二度と大切な人を失わないために。

ゴウウウウウと地をうならせて、ピヨ金の消えかけていた額の火炎が再び、業火となり燃え上がった。目の色すらも今までのピヨ金と違い、曇りの無いすんだ瞳になった。その心にある思いは「自身」の力でピヨ子を助けてみせる」という思いだった。そして曇りの無い眼は事実を運んできたイパヴァただ一人に向けられていた。

「じゃ、君の出番だよ。ロード三大幹部ギルフィ」

「ふん。」「お前ごときに呼び出されるくらいなら」などと思ったがファイマナ様の指令だ。仕方が無い。こいつがピヨ金か。どれ、あたしがお手並み拝見しようじゃあないか。逝きな！地獄にね。疾風セカンドコア開放。続いてサードコア開放更にフォースコア開放そしてラストコア、開放！ファイナル・オン・ザ・ライブスタート。おいで。坊や。」

バビュウン！風がうなる音。地が風を受け砂嵐を巻き起こす。ピヨ金は、急遽、力を出した。全快で。修行も始めたばかりで力加減を知らなかったピヨ金は力を全て出した。

「魔剣ルーザヴァコア第一開放。ピヨ金の業火発動。」

ガコンがキン、ガシャン

周りの岩がどんどん崩れてゆく。

そのどちらかの疾風はダンの手を握った。

「おう！？強引ですな。譲ちゃん。」

ダンは勝手にその手をギルフィと勘違いした。しかしその手は実は、ピヨ金だった

「僕だ。ピヨピヨ金城だ。」

少しがっかりするダン。ピヨ金つまんねーの。」

「このまま逝こう。」

「きさまっ！死んでどうする。」

「ごめん。間違えちった。てへへ。とにかくピヨ子の所に行くよっ。」

「

ピヨ金は走り出した。疾風のごとくギルフィとは別の方向へ。ピヨ子のいる天空の城の方角へ。僕が、ピヨ子を助け出すんだ。

「ピヨ子おおおおおおおおおおおお。」

ピヨ金はたまっていたもやもやとともに、叫んだ。

幕間 別れと修行（後書き）

彼女を守りたい。僕が、守って見せる。

オルフェウスの手記 810 (前書き)

物語で重要な人を、失った。

オルフェウスの手記810

オルフェウスの手記810

ピヨ年 尻が浮く月 三匹のサルが踊る日 腹踊りでハッスルう
ほっほー曜日

ロードが、村を襲う。

頭領が誰かも分らない。

私は、これから、ロードの頭領にあってくる。

この村を守るつもりだ。そして、この記録を、後世に残そうと思う。
私は、これから行く。

ピヨ年 尻が浮く月 七頭の獅子が猫になる日 尻を高速で振って
ウガガのギヤー曜日

結局村は、襲われた。

俺は村を守れなかったらしい。

証拠？

証拠ならこれだ。

目覚めると俺はロードの幹部になっていた。

フィマナの呪文だ。

俺は俺ではなくなった。

この日記はかるうじて書けているが、もう少ししたらすべてを忘れるであろう。

この手記を読むものよ。

頼む。

この俺ロード三大幹部トップワン疾風の怪力ローファを殺してくれ。
そして私の愛する骨骨族のスカルともに。

そして、私は、村を守れなかったふがいなさを正せる。

そして・・・そして・・・。

私は、疾風の怪力ローファ。

ファイマナ様の三大幹部の一人。

ここでオルフェウスの手記は、終わっている。

あくまで、このオルフェウスは、作者の頭の中に一瞬入ってきて出て行った。

果たして、このオルフェウスは、何を伝えなかったのか・・・。

オルフェウスという者は、いったい何者なのか・・・。

オルフェウスは何を伝えなかったのか・・・。

オルフェウスはどうなったのか・・・。

オルフェウスを知っているものは誰なのか・・・。

「オルフェウスは、絶命したぞ。われが改造してやったのだ。我が勢力へとな。」

ある日、ファイマナが伝えに来た。

それは僕の1つの真実を知るすべてを消されたのと同じだった。オルフェウスの事を知るものはいないのか。

物語の鍵は、オルフェイスが、持っていた。

物語の鍵は、失われた。

物語の扉の先は、開かれない。

オルフェウスの手記810（後書き）

オルフェウスの手記は、まだどこかに何枚か残されている。

残された手記を、探し出してほしい……。。

第五章・・・いざ！ピヨ子の元へ（前書き）

ぴよこ。きみにあいたいよ。

どうしたら、君に会えるのか、誰も・・・そう、教えてくれないんだ。

第五章・・・・・・・・いざ！ピヨ子の元へ

第二部　さらわれたピヨ子の元へ
五章・・・・・・・・いざ！ピヨ子の元へ

ガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガガ。

ピヨ金は走った。ダンを引き連れて。

しかしピヨ金の業火は消えつつあった。

雨に打たれても消えないが、力を使いすぎるとぶっ倒れてしまう。

半日は動けないだろう。いや。それはバスカヴィルだけで、半熟ピヨ金は、三日三晩つてところだろうか。

プシュウウ

突如ピヨ金の業火が消えた。

バシャッ

同時にピヨ金も倒れた。熱もある。

ダンは「よっこらせ」というと立ち上がりピヨ金を担いだ。

「こりや疲労と・・・風邪・・・だわな。」

「フヒオエフゴイヴィフォ・・・・イテっ舌嚙んだあ。・・・・エフ
フォウイク。」

ダンが呪文を唱えると、家が出てきた。ピヨ金を担ぎいれた。イテ
っ舌嚙んだあ。は呪文ではない。本当に舌をかんだのだ。

熱のせいか、ピヨ金は、ルービスとの思い出が頭をよぎった。楽し
かった、あのころの。

「お前みたいな化け物は、死んでしまえっ。」

ピヨ金は泥を全身あらよるところに塗られた。つま先から、頭まで。

全身茶色。もちろん……も。例外はない。

そのとき小父さんは不住^{ふじゅう}をしかって、木にくくりつけた。

そして、未来の樹木を後にした。

そつえばくくりつけたときの姿。恥ずかしい姿。SMクラブの変な気持ち悪いあの格好今でも思い出すと笑えるな。あの全裸。あれ、僕たちの全裸って……そうか、羽全部むしりとつたんだっけ。苦苦苦苦苦苦。

不住は死んだのか、誰にもわからなかった。生きているのかも。とりあえず恥ずかしかったろうな。ふふふ。

そつだ。これは僕がいじめられたときのことだ……。

僕は誰かと変わっているの？以前、小父さんに聞いた事がある。小父さんは言ってくれた。お前は普通だよ、って。でも本当は、違つたんだ。

僕のとさかは魔剣ルーザヴァと呼ばれ、僕はみんなから邪魔者扱いされる。図書館にも言つたんだよ。「出て行け、化け物」って言われたっけ。それはそうと新聞、調べたんだ。僕の事、僕に関する記事。僕は、捨て子だった。小父さんが拾ってくれたんだ。嬉しかった。

血の繋がりも無い小父さんが、僕と一緒にいてくれるなんて。

でもその夜に小父さんは殺されたんだ……。

でもそれまでに小父さんからたくさん知恵をもらった。

ピヨ金は、小父さんに沢山の幸せと沢山の知恵、沢山の生き抜くすべ。

虐められたときの回避法。

全部小父さんが……

「死ね。ルービス」

ルービス小父さんの死の間の歯切れの悪い忘れられない記憶でピヨ金は、目が覚めた・・・。

気が付くと目からは、大粒の水が大量に流れていた。それが涙とも知らずにピヨ金はその大粒の水を流し続けた。

何でこの水は出るんだろうか・・・ピヨ金は、考えた。

小父さんも教えてくれなかった事だから・・・。

そして、とてつもなく苦しかった。

まだ熱が・・・。

ふと起き上がると額からぬれタオルが落ちた。

隣でダンがピヨ金に手を置いている。一晩中起きていたのか。

ダンの手がとつても温かく感じた。思わずほっとしてしまった。ダンの手の温もりが、小父さんに似ていた。おかゆも出ていた。ピヨ金はそれを一杯食べた。おいしくて、心にしてみた。この家、どこだろ・・・ふと思ったきつとダンが出したんだ・・・ダン、不思議がいっぱいだからな。

安心してもう一眠り・・・とおもったら・・・ああ、五月蠅。

病人の元へ駆けつけた馬鹿共が・・・。

あいつらが追いかけてきた。

ふらつく頭で、ピヨ金は、立ち上がったが、再び、倒れこんだ。

第五章・・・いざ！三子の元へ（後書き）

君に会えるほど、うれしい事はないよ。

第六章……ピヨピヨバトル開幕！（前書き）

病人に無理させるとは一体全体何事だぁ……。
病人に無理させる馬鹿者は一体何処のどいつだぁ？

私でした。

申し訳なく思います。ピヨピヨ金城。

ごめんなさい。ピヨ金。

以下略

第六章・・・ピヨピヨバトル開幕！

六章・・・ピヨピヨ！バトル開幕

ギルフィの声が耳を劈くような大音響で響いた。

「出て来い。ピヨピヨ金城。今度こそ、命をもらいに来た。」

命貰われるのが いやだから逃げたのに、このメス、分つてな・・・。

ばんっ！と突然豪快に扉が開いた。

「ここにいたんだねえ。さあ・・・この私と対決しなっ。」

ギルフィが言うルールは簡単だが複雑なものだった。ピヨ金には。

ダンとピヨ金、タッグバトルをしろと・・・。

ロードの精鋭ロード暗殺武装集団ロードソルジャーの期待のエース、フミルフとギルフィのタッグ、相性抜群コンビ相手に戦えというものだった。

返事に困っているとのっそりとあいつが起き上がった。今まで寝ていた事すら忘れていたが・・・あの鳥がっ・・・。

「その勝負受けましょうや。なっ。ピヨ金。」

ダンだ。ギルフィは鼻でふふんつと笑って言い放った。

「決定権があるのはピヨ金だかな。お前じゃないんだ。さあピヨ金どうするんだい。」

ギルフィはニヤニヤ笑っていった。

僕の返事は・・・誓ったんだ。ピヨ子を助けるって・・・。

どんなやつとでも戦うって。絶対に逃げないってっ。

「ギルフィ。受けてたっ・・・。僕とダンが。」

・・・・・・沈黙・・・・・・

ポクポクポクポクポクポクポクポクポクポク……
・・チーン！

あああああ！言っちゃった。

もう……取り返し、付かないジャン。どうしよ……と冷や汗だらだらで思っているとダンが、ピヨ金。絶対に勝とうなっ。と言ってくれた。だけどダン。あのね……そのプレッシャーが嫌なんだってばああ。

いい加減分ってほしいよ……もう。長い関係なんだから。あつ。そんないやらしい関係じゃあないからねっ。勘違いしないでね。断じて違うからね！それに……ピヨ子がいるし。

「愚痴愚痴言っても仕方ないので後は省くぞ。」

ダンが僕はまだ書きたい事があったのに、勝手に省いてしまった。

ギルフィの言うには、決定権は僕にあるんだぞといいながら、僕はまだ愚痴愚痴言っていた。まあ、ダンはどういうやつなのでしょうがないか……。

なんていつていとですネエ

「勝手に話が進んでいました。決定権、その他もろもろの事は僕が決めるんじゃないの。ギルフィ、ダン。とまあ、始まってしまいましたね。ピヨ金さん。ピヨピヨバトルロワイヤル2008秋の大激闘……主催者等は、省きましてですネエ。第一バト……」
「どうあがいても第一バトルにしかないんですが、こういいたいので言わしてくださいねっ」ル……開幕」

「勝手に人の心除くなああ。てか……はあ、あんた誰？」

「司会者、腹我豸鷺牆です。」

フミルフ、ギルフィVSピヨ金、ダン

BY司会者、腹我豸鷺墻

ハラガデルソウ

バトル開始。

「ピヨ金。初めから飛ばすなよ。さっきみたいにぶっ倒れても助けらん無いからな。」

こくりとうなずくが、制御できるかは、分らないもとい、無理。たぶん無理。絶対無理。百パー無理。地球がひっくり返っても無理。とにかく無理。

「フミルフ。コンビネーションG-77-30でいくぞ。」

「はい。ギルファイ様。ウィンドウ・ザ・ハッチ開放。」

激しい風とうなる風が織り成す暴風。

このすさまじい風だけで、やられそうだ。

でも僕は、ピヨ子の事を助けるんだああ。どうだ！これでも心意気だけは、いっちょう前でい。ピヨ子のためなんでもする。これからの未来でもそういうつまり、「彼女にフォーリンLOVE」&でも言つてやる。とまあ、話は変わるが・・・。

ピヨ金は、無い頭を使って、こんな複雑？な事も同時に考えていた。

G 77-30とはどんなに恐ろしいコンビネーションなのか・・・。

ピヨ金はこんなことまで考えていた場かなりでもがんばっている。

そんなピヨ金に、一言言つてあげよう。「すごいね。がんばったね。

ピヨ金。」とダンは思った。が、いう暇は無かった。

「フミルフ、風斬羽かざきりばねをふりおろすウウウ、後ろではピヨ金が、S

MキングThaギルファイに捕まったああ。おや、ピヨ金、以外にも

Sか、Mかあ。主人公のくせに、こんな趣味がああ。考えられない

いい。」

ふんっ。勝手な事いいやがって。とピヨ金が思っていると脚に激痛が走った。いや、激痛が歩き回った。

がくん！

ピヨ金の膝がかくんとリズムよく落ちた。まだ、なおってなかつ・・・。

吐き気がする。頭痛もす……。ダン、ぴよ子、小父……

ピヨ金は、意識を失った。そして、最後に聞いた声は彼だった。

「ぴよ金、ぴよきiiiiiiiiiiiiiiiiiiiiん！」

「……………ああ。ダンじゃないか。何……言っただか。
う……るさいよ。自分の名前ぐらい、分ってる……よ。」

ピヨ金には届かなかったが、ギルフィの声もした。

「なんだい。よわっちいやつだね。ふん。さあて、その不良鳥。

今度はあんたの死ぬ順番だよ。覚悟は出来ているかな？ 仲良く、あのヒヨコの後を追うが良さ。フミルフ。行くよ。」

「はい。ギルフィ様。ジェガキライト・ナガルドアバルバス電界風霧烈風羽！」

ダンは立ち上がった。

じゅかいしつりんへきくつのさばき
「樹海光臨碧空之裁！」

血のように赤く染まった空から、樹海が降り注いだ。

「ふん、こんなものを出すのが限界かい？ 案外だらしないんだねえ。

もう勝ちはないんだろ。しになよ。フミルフ、お前はあれを殺めな

エイト・ウィザレはいりゅう
八又鞭粉碎龍。」

樹海は、粉々に粉碎された。その樹海はダンの視界をふさいだ。

「ふん、まだまだ甘いわああああ！ 邪道鳥。」

ジェガキライト・ナガルドアバルバス
電界風霧烈風羽が目の前までできている事に、きずけなかった。

「これで、終わりだああああああああああ！」

ダンは、フミルフが振り下ろしたそれによつて、きりつけられ、更に風により、かなり後ろの岩に強く、叩きつけられた。

頭から岩に激突したため、ダンの体は、血だらけだった。

「……………天空の槍降。」

地に染まったような色から、槍が大量に……無量大数降ってきた。

それらの槍に、ギルフィ、フミルフは、戸惑う。

「フミルフ、何とかしなあ！」

ジェガキライト
「はい、ギルフィ様。電界風！」

防御壁を張ったフミルフだったが、槍はその防御壁をも、無効化して、降り注いだ。

「ッたく、役に立たないねえ。 エイト・ウィザークル 八又鞭円陣！」
鞭が槍を次々とはじき返していった。

ついに槍の雨はやんだ。

「さあて、野蛮鳥。もうネタはないのかい？ じゃあ、このギルフィ様の手にかかって、死にな。 ウィップストグドデス 鞭石化鳥一閃。」
石化した鞭は、石ごと、ダンの肉体を貫いた。

ついにダンは、倒れた。

第六章・・・・・・・・ピヨピヨバトル開幕！（後書き）

次回、ピヨピヨ金城、ダンの運命はいかに！
乞うご期待！

そんなに期待にも添えないけど。
というか期待する人いるんですかー？

第七章・・・ピヨピヨ！死刑執行？orほんわか我が家で？お休みタイム（前巻

ピヨ金一寝てもおめてもピヨピヨ金。

第七章・・・ピヨピヨ！死刑執行？orほんわか我が家で？お休みタイム

7章・・・・・・・・・・ピヨピヨ！死刑執行？orほんわか我が家で？お休みタイム

「・・・・・・・・預金。預金。」

うるさい・・・・・・・・俺は・・・・・・・・金・・・・・・・・じゃな・・・・・・・・びよ・・・・・・・・城・・・・・・・・・・。

これが、夢か、現実か、幻想か、妄想か、虚言か、それともやつぱり、夢なのか。はつきりいえることは、1つまだ熱は、下がっていない。超高温だ。熱冷ましシートが必要なくらいだ。現実にはそんな贅沢はしたくても出来ないのだけれど。あれ、なんか喉の当たりがヒヤツとする。でもこれ小さいなあ。贅沢はいえないか。でもあの後僕どうなったんだろう・・・・。確かこうなったんだよね。

あたり一面が、暗く暗く・・・・なっていた。僕は・・・・誰？何のために生まれてきた何ナノ。僕は、僕というものは、何。小父さんこれは教えてくれなかった・・・・よね。あれは誰？あれが僕？これが僕であってあれは僕じゃないよ？ねえ。どれが僕なの・・・・。僕の意識はどこかへ落ちた。

ダン。出来れば、その喉に当てているものはもうちよつと、うん。もうちよつと上。ん？誰の声だ。これ。ダンの声じゃな・・・・！まさかっ。

「ピヨピヨ金城、およびピヨピヨ金城、従者ダン・マーカスをピヨピヨバトルロワイヤル2008秋の大激闘敗北者として死刑に処す。死刑執行人として、勝者、ギルフィ、フミルフまえへ。死刑執行長剣「喉笛」を空にかざし、敗北者の元にふりさげよつ。」

ダンの名前って、マーカスだったんだ。なんてのんきな事言ってる

暇無くて。

これが、夢か、現実か、幻想か、妄想か、虚言か、それともやつぱり、夢なのか、これではつきりしましたっ。これは、夢です。夢ですともっ。この喉元に当たっている二つの「喉笛」も実は、ダンが乗せてくれた濡らしたタオルですとも。寝返りですれたんだ。きつと。ダンも直してくれればいいのに。また寝ているのかなあ。

「死刑執行始めっ」

やった。これで確定。夢なんて生易しいものではない百ぱ〜ね。したがってこれは、現実か、幻想か、妄想か、虚言に決定。

僕は、妄想でこんな怖い事は妄想しないし、こんなこと体験した事も見た事も無いから、幻想でもない。

虚言って何なのか知りもしないのでその可能性もZERO

つまりこれは、現実。ふー。すつきりした。と僕は再び夢の世界へと落ちていった。

しかしこのまま夢の世界へと落ちてゆくと、もうこの世界に戻ってこれない。したがって僕は目を恐る恐る開けた。

ギラッ

僕は見なかった事にして現実逃避をした。しかしこのまま現実逃避すると、もうこの世界に戻って・・・・・・これない。したがって僕は恐る恐る目を開けた。

ぎらっ

もうあほらしいネタが無い。したがって僕は、目を閉じれなかった。殺される殺される殺される殺される殺される殺される殺されるころーさーれーるーう！

ダン。ダンは・・・・。もしかして・・・・まさか・・・・そんな事って隣には、出血多量のダンがいた。もう動いてはいなかった。息すらもしていなかった。

「ま・・・・さか・・・・ダンが・・・・死ん・・・・だ。うおおおおおおおおおおおおお」

業火、限界を突破した。ダンから禁じられている行動をした。

「貴様らを許すわけには行かぬ。死を持って償うがよろしい。この罪の支払いは、そちらの命という大きな代償を持って、償われようぞ。零次元突破ヒート、バースト。貴様ら、覚悟せい。行くぞっ」一瞬だった。ピヨ金がまさかのピヨ金の限界突破は。それで鳥たちを殺めたのも。

そして再び、膝がカクンっとし、倒れたのも。何しろまだ直っていないのに、またピヨ金を限界こえを重ねたのだから。ピヨ金は、再び思い出した。

「ダンは……。」

再び僕が起きるのはいつ何だろうか。それさえきずに僕は、気を失った。

再び起きたとき、ダンは僕の近くにはいてくれないのだろう

また僕は、何もせずに大切な鳥たちをも失った。

三回目。

僕って何も出来ない。

出来やしないんだ。

ピヨピヨ金城って駄目な奴なんだ。

ピヨ金って。

「……預金。預金……。預金……。」

だから、僕は預金じゃなくてピヨ金なんだったば。でもこの声。

「だ……ん。」

やっと、僕は目覚めた。そして僕の眼下に広がる前には死んだと思っていたダンの姿があった。そのダンは血の通った暖かい本物のダンだった。……生きていた……。よかった。

ゲホッ。ゲホッゲホウ。

どうやらまだ、治っていないらしい。

「しばらくここで休むから、ゆっくり寝てな。」

そのダンの言葉でピヨ金は安心してもう一度眠りに付いた。

ダンが出した仮住まいにへと、背負われて連れて行かれた。

夢の中で小父さんが出てきた。小父さんはピヨ金に一言告げて、消えた。

「俺の復讐のためだけに生きるな。ピヨ金。お前はお前の決めた人生を歩んでいけ。俺のことはもう忘れる。俺が殺された日の事も全て。俺は、いつでもお前と一緒にいる。我が息子、俺の全てをささげよう。ピヨピヨ金城。ありがとう。」

これは、小父さんが僕だけにくれたたった一つの言葉。いや。いつだって小父さんは僕にだけ言葉をくれた。小父さんの言葉。

再び目が覚めると、ピヨ金は目から水が出てきた。前回は何なのかわからなかった涙だ。でも今度はこれが何なのか、何のために流れるのか、今はきちんとわかる。

【涙】なみだ

小父さんが教えてくれた。夢の中の小父さんが。

再び元気になったピヨ金とダンは天空の城「ジューピター」を目指していた。

「休んだ分は、急がないとね。ダン。」

「でもピヨ金の炎は使っなよ?」

「使わないよお。あはははははは。」

笑いながら、のんびりと、僕は目標に向かって、進んでいる。一歩一歩踏みしめ。そして、踏みしめるたびにピヨこの元に一歩一歩地被っている。天空の城は、もう目の前だ。

第七章・・・ピヨピヨ！死刑執行？orほんわか我が家で？お休みタイム（後書

~~~~~

~~~~~

じゃ、そんなわけで！

第八章・・・ピヨピヨ！天空の城へ！（前書き）

これからしばらく更新は出来そうにありません。今年、受験とやらなもので・・・。

第八章……ピヨピヨ！天空の城へ！

目の前に広がる大きな城は、天空にうかんでいた。
天空の城。ジュピター。

これがつその城の名前だった。

「ここが、天空の城、ジュピター？」

ピヨ金が首をかしげてつぶやく。

「ここが、天空の城、ジュピター。」

ダンさんが首の角度を変えずに答える。

「ここに、ピヨ子がいるんだね。」

ピヨ金は脳裏にピヨこの姿が浮かんだ。

小説の中では危険なほどにいきなり出てきた僕のガールフレンドにして、この小説のヒロイン。

デートした事。

「助けに行こう。ダン。死んでも絶対にピヨ子だけは助け出してねえ！」

羽をグーにしてダンにアピールする。

ダンも羽根をグーにしてピヨ金の頭を虐待するかのように鈍い音でガス！

すると何処からともなく、声がした。それは天空の城から来たようだ。

「待て、貴様らをこの城に入れるわけには行かない。」

天空の城の衛兵が武器を構え、降りてきた。

「貴様らにこの天空の城皇女にして時期王妃ピヨ子様を貴様らに渡すわけには行かない。ここで、死ね！」

羽を切ると刃のように投げつけた。

ピヨ金のぶくぶくほっぺたから赤い水が滴り落ちた。

「ひとひねり！」

ダンがいつの間にかノシ烏賊にした。

「さあ、ピヨ金、行くぞーう。」

ピヨ金を連れて、ダンは天空の城へと強引に進入して行った。

しかし、そう簡単には進入できそうになかった。

ドアの前に一匹の鳥がいた。

「待っていたぞ。ピヨピヨ金城。この世に恐れられている魔剣ルザヴァを持つ呪われたヒヨコ。」

そいつは鉄仮面の鳥だった。

第八章・・・ピヨピヨ！天空の城へ！（後書き）

つづくうううううううううううううううう

第九章・・・ピヨピヨ！ダンVsライディン（前書き）

ピヨキンってどうでも良いですよねえ・・・。作者がこれって・・・。
。困難で更新しねえだろうな・・・。

第九章・・・ピヨピヨ！ダンvsライディン

章・・・・・・・・ピヨピヨ！ダン対ライディン　ピヨ金対ライディン
ピヨ子はこの中だろうけれど、前方には、　　がいる。

「きたな。ピヨ金。われがピヨ子様の守護団兼友達係。ライディンだ。」

風がなびく。その風が仮面の鳥ライディンの羽毛を揺らめかせ、僕に挑んできた。身の程知らずが。このピヨピヨ金城めっ。誰に挑んでんだよ。守護団なんだろう？。僕が勝つなんて、無理なんだろう？でももう後には引けない。挑まれてしまったのだから。挑んだ分けなく、挑まれたのだから。

風が吹き荒れる。僕の魔剣もなびかせて、ダンの羽織物、ライディンの鶏冠も靡かせて決闘は始まった。

「ピヨ金、これ使って中に入って先にピヨ子助けとけ。」

ダンが渡してくれたのは城など何処にでも在る錠前でも開けてしまふ恐ろしい強盗グッズ、「せんにゅークンEX」

それを僕は使い、天空の城の長く険しい階段【ひたすら続く何処までも続く長い階段】を上り始めた。

「主を先に生かせ、自分が犠牲になる。賢い選択だ。何故なら・・・」

ライディンが消えた。

「われには勝てぬからだ。」

出てきて言葉を言うと同時に、ダンを思い切り鶏冠で切りつけた。

「ぐわっ。」

予想もしなかった強さにダンは呻いた。速さと痛さに。そして、我には勝てぬからだという言葉に敏感に、反応していた。

「このくらいで・・・」

「弱音を・・・」

「吐いていて・・・」

「我に・・・」

「勝てる・・・」

「ものかつ・・・」

一言ごとにダンを斬りつける。ダンの羽織物は血で赤く染まっている。その地でさえも泥に付き赤茶色になっている。しかしダンは、傷だらけになっても負けまいとして、ピヨ金のためとして反撃のチャンスをつがっていた。

ピヨ金は、ロードの殺戮集団相手に、鶏冠の魔剣ルーザヴァを両手に、必死になり戦い。ピヨ子の元へと進もうと努力しているのだった。しかし、その実態はピヨ金がロードに負けているのだった。

こうして始まったピヨピヨ金城幼年期「ピヨ子奪回！打倒フィマナジュピター攻略戦」ピヨ金は愛するものを救えるのか。そして小父さんが殺されたわけとは・・・やっぱ道楽なんでしょう！【断定】
ピヨピヨ金城第三幕へ続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8024e/>

ピヨピヨ金城　～今、空へ立つ！～

2010年10月9日23時30分発行